

賀川豊彦の「乳と蜜の流るゝ郷」 (その6)

1934(昭和9)年8月号

東助、肺炎を発症し、中野組合病院へ入院。

退院後、中ノ郷質庫信用組合を訪ねる。



監修 **堀越芳昭**
山梨学院大学 元教授

高円寺消費組合の再建に奮闘した東助を病が襲う。元旦を床の中で送る羽目になった東助を小浜里子が必死になって看病する。さらに童話作家の浦江夫人が中野組合病院への入院を勧め、手続きもしてくれた。二人の女性に助けられて東助は入院する。

入院した東助は、中野組合病院をみて「農村の貧乏の最大原因である病気を救うくふうが医療利用組合によってできること」を確信する。

一日も早く福島に帰ろうとするも旅費がないため中ノ郷質庫信用組合を訪ね、五円を貸してもらう。この信用組合が社会事業の性質を持っていることに注目し、福島に帰って理想的な組合をつくってやろう、と決意する。

今回の舞台になった中野組合病院、中ノ郷質庫信用組合とも賀川が設立に関わったものであり、小説を通して自分の考え・理想とするところを大衆に訴えようとする賀川の手法の一つである、ことにも注目したい。

■ 東助、過労で倒れ、二人の女性に助けられる

高円寺消費組合の再建に向けて奮闘した東助を待っていたのは、過労そして入院であった。

十二月も押迫って、餅つきと餅の配給に、三晩も徹夜をした東助は、もうあと一日というところで倒れてしまった。しかし、困ったことは無給の約束で組合にはいった彼として、医者薬代の払える道理はなかった。

発熱する、咳は続く。元旦もとうとう床の中で送った。新しく来た配給人は、みんな、正月休みに遊びに出かけて、病人の彼を看てくれるものはなかった。とうとう困った末、彼は新しくきた炊事のおばさんに頼んで、近所の医者に来てもらうようにした。医者はすぐ来た。そして、肺炎の初期だと診断し、注射一本をして帰っていった。困ったことは薬代がない。



こうした窮地にあった東助を助けたのは、かつて東助に裕(あわせ)をくれた相川家の女中小浜里子であった。炊事のおばさんから連絡を受けた里子は飛んでやってきて献身的な世話をする。まず、薬屋に行って氷袋を買い、次に医者のところへ薬を取りに行った。これらの代金は彼女の懐から出たものであった。これに対し、東助は

「このご恩は、いつかはお返ししますから」

とお礼を言った。正月二日の午後四時から、四十度の熱が続く東助を里子は必死で看病した。

そういう場面に炊事のおばさんから事情を聞いて、高円寺消費組合家庭会の幹部で、童話作家の浦江夫人が夜の十時過ぎにやってきて「東京医療組合の中野病院」への入院を勧め、翌朝再び見舞いに来た彼女は、病院が入院を認めてくれたこと、小型の自動車で迎えにきてくれることを東助に告げた。

こうした二人の女性の親切、助力により東京医療利用組合の中野病院(以下、中野組合病院)に入院する。

■ 中野組合病院へ入院

医療組合の病院は、省線中野駅の南口から、あまり遠くないところにあった。三階建てのどうどうたる建築であった。消費組合のようなけちな建築ばかり見ているものには、どうしてこんな大きな病院が建てられるかということが不思議であった。それに、なおびっくりしたことは、診てもらいに来て

いる患者の多いことであった。

実際の中野組合病院は、1933(昭和8)年8月28日に上棟式を挙行、同年12月17日に落成している。この落成は、賀川・新渡戸稲造らによる東京医療利用組合設立運動の成果であり、賀川は自分が関わった設立間もない中野組合病院を小説に登場させたのである。賀川とともに医療事業を支えた黒川泰一は「今日からみればこじんまりしたものであったが、わたしたちにしてみれば、堂々たる大病院でりっぱなものであった」「開院すると日を追うて、うなぎのぼりに患者が殺到し、職員はまだ馴れないこともあって、目がまわるように忙しかった。わたしも初代の事務長として体当たりでとりくんだ」と1975(昭和50)年に回想している。建物だけでなく、児童健康相談、新生児のための保健婦による家庭訪問事業、虚弱児のための夏期臨海学校などを行う最先端の病院であった。

こういう病院をみて東助は、

「それはまったく夢であった。磐梯山のふもとを出るときには、村を救う一つのくふうを発見すればよいと思っていたのであった。が、東京に出て少しの間ではあったけれども、消費組合の再興に努力し、今また農村の貧乏の最大原因である病気を救うくふうが、医療利用組合によってできるということを見せつけられたので、なんだか新しい天地にはいって行くような気がした」

のであり、この思いが、後々、磐梯山のふもとに医療組合病院を実現させるのである。

東助は院長をはじめスタッフにも恵まれた。大瀬院長は

「田中君というのはきみですか?……だいじょうぶですよ。安心したまえ。きみは高円寺消費組合のためにずいぶん尽したんですってね。少し無理しすぎたんだよ。(略)さっき、きみのほうの組合長の本居潔君から電話がかかってきてね、きみの入院料は本居君個人で心配すると言っていたから、幾日でも、なおるまでいてくれたまえ」

と東助を安心させた。

主事の白川平一郎は、東助が消費組合に関係していたということから朝晩見舞いに来て、医療組合の全国的状況や、自分の村でも医療組合を作りたいと思っていた東助の質問に答えながら経営上のノウハウについても教えてくれた。東助は、入院したこともけっしてむだではなかったと、天に感謝した。

■ 中ノ郷質庫信用組合の社会事業

退院が決まった東助は、

「一日も早く磐梯山のふもとの山里に帰ろうと決心した。が、旅費がない。このうえ小浜里子や浦江夫人にやっかいをかけることを好まなかった。され

ばといって、組合長の本居に泣きつくこともできなかった。

そこで思い出したのは白川平一郎の説明のうちに、東京医療利用組合の姉妹組合に、中ノ郷質庫信用組合というのがあることを、聞いたことであった。(略)それで彼は、小浜里子にもらった外套を質入れして、五円くらい借りて、すぐ故郷に帰る決心をした」

のであった。東助は、退院した翌日の午前中にこの質庫信用組合を訪問した。実際の中ノ郷質庫信用組合は、賀川、木立義道によって設立が進められ、1928(昭和3)年に営業を開始した。一般の信用組合とは違って下層労働者に親しまれていた質貸付を手がけ、金利の安さと流質期限の長さで喜ばれ、予想以上の発展をとげた、といわれている。先の中野組合病院と同様、賀川は自分が設立に関わったこの質庫信用組合を小説に登場させたのである。

東助は、外套を質に入れて五円を借りることができた。その折に四十ばかりのおかみさんの「娘を芸者に出す」という相談に対し、従業員が

「そりゃそうと、おかみさん、こんど、この組合は、府庁の許可を得て、五十円一口の生業資金を貸し出すのをご存じですか？」

利息も年四朱ですから、これほど安いお金は、どこにもありませんですよ。去年信用組合は、四千五百円ばかりもうけましたから、そのお金を全部、組合員のうちで、いちばん困っていらっしゃる方に低利でお貸ししようということになったのです」

と説明し、おかみさんは五十円が借りられ、

「これで娘を芸者に出さなくても済ませることが出来ます。…組合は、わたしたち一家の救い主ですわ」

と感謝の言葉を述べる。

これを見ていた東助は、

「(——そうだ、そうだ。こうした社会事業の性質を帯びた産業組合を村に作りさえすれば、東北は救えるのだ。早く福島県に帰って、理想的な組合を作ってやろう)」

彼は五円の金を借りたよりか、模範的な信用組合を見たことによって、いっそう力づけられた。それで彼は、そこにいた従業員にいちいちおじぎをして、表に出た」

のであった。

そして、この後、東助は懐かしい人と再会する。次回へ続く。

<参考文献>

『家の光』1934(昭和9年)8月号

黒川泰一『沙漠に途あり～医療と共済運動50年』(家の光協会、1975(昭和50)年)

*文章の引用部分は復刻版『乳と蜜の流るゝ郷』(2009年)を参考にした。